

私の研究テーマは、日本の新聞、本、雑誌、テレビ等さまざまなメディアにおいて、「宗教」にまつわる言葉や概念がどのように取り扱われているか、ということである。

義務教育においてほぼ宗教について学ぶことのない多くの日本人は、メディアから宗教について学ぶことが多い。最近の世論調査の結果をみると、宗教を信じている人の数は減っており、また宗教が怖いものであると思っている若者も数多くいることが分かる。日本のメディアにおいて、「宗教」を誰が、誰のために、どう定義しているのか、そしてその定義を人々がどう受けとめているのかを考察することが重要なのではないかと考える。

現在私は、メディアにおける表象の観点から、テレビ等で活躍のめざましい占い師の細木数子やベストセラーとなったいくつかの占い本の中で「宗教」についてどのように言及しているかについて考察をしている。細木の出版した占い本を見ると、細木の言及は最初の頃は自らが考え出した「六星占術」だけに集中しているが、一九八五年

メディアにおける宗教の表象 ベンジャミン・ドーマン

以降に書かれた本の中には「神」「仏」「先祖供養」など宗教に関連する言葉が登場する。スチュアート・ホール氏は、文化の捉え方のひとつとして、社会の構成員の間で共有された概念としての意味の創作と交換を挙げているが、細木の場合、これらの本において、「神」「仏」「先祖供養」を日本人に共有されるべき概念として六星占術の中に組み込んで日本の文化・伝統の一部であると主張している。先祖供養は一般的に仏教と深い関連があるものであると思われるが、細木はこの考え方自体が間違っていると述べている。ある意味で、細木はテレビ出演や数多くの著作といったメディアを通して何が宗教なのか、あるいは何が宗教ではないのか、ということを日本社会の中で定義する立場にあると考えることもできるのではないだろうか。

(ベンジャミン・ドーマン／東洋哲学研究所委嘱研究員)